



シンポジウムにてSNUの研究者・学生らと



研究紹介の聴講風景

ていく強い意志を持っている。これが、今回の交流の契機となった。彼らを受け入れた大学院ヘルスシステム統合科学研究科は18年、岡山大学に新設された医工連携と文理融合の特徴を持つ本邦初の「統合科学」の学位を授与する大学院で、ヘルスシステムにおける社会的課題の発見から解決策を見出し社会実装へ分野を越えて考えつなげることが出来る。このため岡山大学の総合大学という利点を生かして、文系、理系、医学医療系の部局が協力して構築した新たな研究科はヘルスケアイノベーション、医療機器医用材料、バイオ・創薬、ヘルスサイエンスの4部門で構成され、幅広い領域をカバーできるように教員を配置している。

SNUとは学生および教員の交換に合意して交流協定を19年4月に締結した。今回のさくらサイエンスプランでは当研究科が看板とするユニークな文理融合と医工連携の特徴を視察し、その目的、カリキュラムや研究内容について理解することを研修の目的とした。

**統合科学による
教育研究拠点を海外へ**

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科では、2020年1月20〜24日の日程でインド・コルカタにあるシスター・ニヴェディータ大学(SNU)から主にバイオテクノロジー分野の教員、研究者、学生の計5名を受け入れ、岡山大学に新設された統合科学の教育研究を体験するために「ヘルスシステム統合科学研修」を実施した。

SNUは文系理系を含む8学部に学士プロ



妹尾昌治
(岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科教授)

特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第244回

岡山大学の活動報告

※現在、さくらサイエンスプランは新型コロナウイルスの感染防止のため、今年度のプログラムの実施を延期しています。

プログラム	
1日目	日本到着
2日目	学長表敬訪問 シンポジウム(前半) 歓迎会
3日目	シンポジウム(後半) 岡山大学津島キャンパスツアー および研究室見学
4日目	岡山大学鹿田キャンパスツアー および研究室見学 後楽園、岡山城視察
5日目	関西国際空港にてお別れ

グラムおよび修士プログラムを擁して2017年に創設された私立総合大学。この大学では、これから設置する博士プログラムの中にバイオテクノロジーを加え、これを将来大学のCOE(Center Of Excellence)として育てていく強い意志を持っている。



人工網膜研究開発の紹介風景



意見交換風景



中性子医療研究センター見学

東インドを中心に教育・医療等の経営を展開するテクノインディアグループである。彼らの教育は大学だけでなく高校や中学校にも及んでいることから、将来的には岡山地域の高校との連携を視野に入れた国際的な高大連携へ発展させ、若い人材の国際感覚醸成や留学生の受入派遣の基盤を築く契機となっていくことを期待している。

学生が将来就職した場合に社内教育を軽減短縮して即実践力として活躍できる人材となることが大きく期待される。

今後の展望

教育研究の拠点形成へ向けた国際的な戦略が言うまでもなく必要になってきた。バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、神経科学、がん治療、バイオマーカーといった先端技術の研究開発を打ち上げるだけでなく、それらが何のために必要か、人類共存のために掲げたSDGsによる価値観の共有が背景として重要であることを認識しつつ進めることが息の長い交流を築くこととなるであろう。

プログラムの成果

シンポジウム形式で若手教員からプレゼンテーションを行い、学生を含めて質疑応答と意見交換が行われたことで、若手教員が研究科の設置の意義を理解し、国際感覚を養う意味でFD上大変良い機会になった。交流の中から得られた先方の情報として、SNUがインド国内での教育研究に取り入れているユニークなシステムとして企業との連携がある。このシステムは社会の中の課題発見と解決を

この交流では、当研究科が主催する「第11回高度医療都市を創出する未来技術国際シンポジウムヘルスシステム統合科学と医療人類学そのグローバル的視点」を通して各部門の紹介と研究トピックを扱い、研究室や学内施設及び設備の見学と同時に意見交換を行った。医療機器や創薬に関係する種々の研究開発について医療現場との密接なコミュニケーションがあることや、終末医療における最終診断の倫理観を考慮することの難しさ複雑さを同時に考える機会が多くなく、分野を越えた発見として活発な議論が交わされ、さらに医療機器や患者の看護診察のシミュレータ設

備での体験も加わって、来日した一行にとっては新鮮かつ印象的な経験となったことが窺えた。また、短い時間ながらも岡山市内の後楽園、岡山城などの視察を行って、岡山という地域の文化にも親しむことができ、参加者からは、学内での体験と重なって日本への興味と親近感が増したという意見を聞くことができた。

今回のシンポジウムや視察、体験等を通して、日印両国の若手研究者および学生の交流を深めることができた。日本の先端科学技術への関心を高め、日印両国交流発展の一助となると期待している。

が、この思想は、まさにヘルスシステム統合科学研究科の設置理念に共通する点であり、今回の交流は、今後の交流を継続していく上で、相互に長短所を補完していきける関係を長期にわたって築くことができる好機となったと考えている。

さらに、今回の参加者の中に将来当研究科で博士の学位を取得したという留学希望者が現れたことも成果の1つである。今後も留学希望者は継続して現れることが予想される。

また最近、SNUと打ち合わせを行い、今回のフォローアップとしてシンポジウムを来たる3月16日に、第12回シンポジウムをオンラインで開催することが決まった。現在企画を立案中であり、広く参加を呼びかけたいと考えている。